

1 新たなミュージアムの「展示」の目的について

・展示機能の具体的な内容を検討するにあたり、基本構想で示した「使命」及び「めざす姿」のほか、「事業活動の考え方（案）」（【資料2】）、「収集の考え方（案）」（【資料3】）を踏まえ、**はじめに、展示の目的を次のとおり整理した。**

■展示の目的

- 1 川崎の過去から現在の変遷を伝え、市民とともに未来を考えることができる場となる
- 2 市民が親しみ、楽しむことができ、様々な交流や学びが生まれる場となる
- 3 川崎の特徴や市民生活に関する資料・作品の魅力や研究成果を公開・発信する場となる

2 「展示」の棲み分けについて

・「1 新たなミュージアムの「展示」の目的について」を踏まえ、ミュージアム（拠点施設）とまちなかミュージアムにおける「展示」の棲み分けを整理するため、**それぞれが担う役割及び実現できることについて、次のとおり整理した。**また、それぞれが具体的にどのような手法で実現することができるのか、想定する手法を併せて整理した。

※まちなかミュージアムでは固定的なサテライト施設は設けないことを前提とする。

ミュージアム（拠点施設）の「展示」が担う役割及び実現できること	まちなかミュージアムの「展示」が担う役割及び実現できること
<p>来館することで得られる経験や、デジタルではない「リアルなモノ」に出会える機会を提供 <small>（基本構想より）</small></p>	<p>市民にとって身近な文化や芸術に関する接点を増やし、新たなミュージアムがもたらす効果を地域や生活に波及させていく <small>（基本構想より）</small></p>
<ul style="list-style-type: none"> ● 川崎のこれまでの成り立ちをはじめ、歴史や文化の特徴について総合的に知るができる。 ● いつ誰が訪れても、川崎の概観を知ることができる。 ● 川崎の未来について、多様な人々が集まり、考え、相互理解を育むことができる。 ● 生田緑地内の施設をはじめとした様々な文化施設と連動した展示や関連事業ができる。 ● 温湿度管理が必要な作品や大型作品など館外展示が難しい実物の資料・作品を公開することができ、本物に触れる体験を多く提供できる。 ● 収蔵庫に保管している多くの資料・作品と来館者をつなぐことで、来館者が自由に自分の視点で鑑賞し、考え、発想を広げることができる。 ● 収蔵品に関連する様々な資料・作品を他館から借用するなどして、巡回展をはじめとした多彩な企画展示を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内各地域のこれまでの成り立ちをはじめ、歴史や文化の特徴について重点的に知ることができる。 ● 市内各地域の成り立ち等を踏まえ、地域ごとの未来像について、その地域に住む方を中心に、市民がより自分ゴトとして考えることができる。 ● 出張展示を行うことで、集客面など、市内の関係施設との相乗効果により、新たな層にアプローチができる ● デジタル技術の活用やモバイルキットを利用した展示等により、学校をはじめとした教育現場への発信が強化できる。 ● レプリカや運搬可能な資料・作品（環境等の与件次第では館外展示が可能なもの）を市内各所で公開することができる。また、拠点施設の展示に興味を持つきっかけを与えられる。 ● 市内の各地域の歴史や環境を活かした資料・作品の見せ方ができる。（例：資料が出土した史跡にて出土遺物を出張展示する、地域の情景を描いた作品を紹介するなど）

■ミュージアム（拠点施設）で想定する展示の手法

- ① いつ誰が訪れても、川崎の概観が総合的にわかる**常設展示**
- ② 他館からの借用資料を組み合わせた大きな**企画展示**
- ③ 本物に触れる体験を提供し、来館者が自由に資料・作品を見学してインスピレーションを得られる**収蔵庫展示**

■まちなかミュージアムで想定する展示の手法

- ① **デジタル技術を活用した展示**
- ② 外部施設等での**レプリカ資料・作品を使った展示**
- ③ **保存環境に考慮した実物展示**

※ 具体的な取組については、実際に運営する中で試行錯誤しながら取り組んでいく。

3 ミュージアム（拠点施設）における「展示」の考え方（案）

- ・「2 「展示」の棲み分けについて」で整理した内容を踏まえ、まず、**ミュージアム（拠点施設）における常設展示、企画展示、収蔵庫展示それぞれの方向性を整理**することとした。（まちなかミュージアムの「展示」の考え方は、ミュージアム（拠点施設）における「展示」の考え方を踏まえて深度化していくこととする。）
- ・はじめに、川崎市のミュージアムとして、いつ誰が訪れても鑑賞することができる、ミュージアムの顔ともいえる常設展示について、次のとおり検討した。

（1）常設展示により伝えられること

- ・常設展示は、**いつ誰が訪れても川崎の概観を総合的に知ることができる場、モノの魅力を分かち合うことができる場**を目指し、次のことを伝えることができる展示を実現できるよう、検討を進めていく。

- ① 市民にとって、**自分が気になった時に、展示を通じて川崎について学び、考えることができる。**
- ② 市外から訪れた方に対して、**川崎がどのようなまちであるのか、どのような特徴があるのかを常に伝えることができる。**
- ③ 写真や映像からだけでは実感できない、**モノ（実物）に触れる体験を提供することができる。**

（2）常設展示の方向性

① 常設展示で取り扱う資料・作品

- ・新たなミュージアムは、被災後においても豊富な資料群を有する市民ミュージアムの収蔵品を引き継ぐことから、**常設展示で取り扱う資料・作品は、川崎の概観を体系的に伝えることに長け、保存の面からも長期的な展示にも適している博物館分野を主な対象**とする。
- ・市民ミュージアムの美術館分野の資料・作品については、保存の面から長期的な展示に適さないものが多いことなどを踏まえ、専用の常設展示は設けない方向で検討を進めるが、**常設展示における展示構成において、博物館資料と併せて紹介することにより効果的な発信が期待できる場合などにおいて、積極的な活用を図っていく**こととする。
- ・常設展示で取り扱う具体的な資料・作品については、被災収蔵品のレスキュー状況を踏まえながら、今後精査を進めていくこととする。

② 展示テーマの再検討

- ・学芸員へのヒアリングを受けて、これまでの市民ミュージアムの常設展示のテーマ「水と共同体」については、展示内容に一定の制約が生じるなど現場の視点からも課題があったため、新たなミュージアムにおける常設展示のテーマについては、**テーマ設定の有無から再検討を行うこととする。**

【参考】市民ミュージアムのこれまでの常設展示テーマ「水と共同体」

- ・これまでの常設展示では、川崎の歴史を考える上で多摩川や東京湾といった「水」の役割や、「共同体」が日常の基本単位として、社会生活を動かしていたことに重きを置き、「水と共同体」という展示テーマを設定していた。
- ・一方で、現場の学芸員の意見では「都市化以降の川崎の特徴を扱いにくい」、「扱える事象が限定的になってしまう」、「通史が捉えにくい」などの指摘もあった。

<市民ミュージアム常設展示写真（被災前）>



③ 常設展示で押さえるべき重要なポイント

- ・「（1）常設展示により伝えられること」を実現するにあたり、常設展示の具体的な内容を検討する上で押さえるべき重要なポイントを次のとおり整理した。

① 川崎の通史

- いつ、誰が見に来て、川崎市の歴史や文化（特に近現代）が概観でき、学ぶことができるコンテンツが必要。常設展示として通史を扱うことにより、川崎市の全体像を伝えることが必要。

② 川崎らしさ

- 川崎市の地域の博物館として、その通史を通じて、「川崎とはどんなまちなのか？」「川崎の特徴とは何なのか？」を伝えることが大切であり、そのためには、「川崎らしさ」に着目した展示内容とすることが必要。

③ モノ（実物）の魅力

- 拠点施設でしか出会うことができないモノを展示する場として、川崎にまつわる多くのモノを来館者に公開し、観るだけでなく、実際にモノに触れるなど、様々な体験・体感の取組を通じて、モノの魅力を伝えることが必要。

④ 「川崎の通史」について

- 本市では、令和5年度に「川崎市文化財保存活用地域計画」を定めており、常設展示の通史展示で伝える歴史的事象については、**本計画に記載された「川崎市の歴史文化の特徴」を参照し、整合性を図りながら具体的な内容を検討していくこととする。**

※下記記載内容は、本計画記載の「川崎市の歴史文化の特徴」の内容を要約

(1) 丘陵で営まれた暮らし	(2) 水辺に育まれた地域	(3) 各時代に取り込まれてきた最先端の文化や技術	(4) 江戸を支える社会基盤の整備により発展したまちと賑わい	(5) 日本の近代工業化を牽引しつつ拡大・発展した都市
<ul style="list-style-type: none"> 多摩丘陵には旧石器時代から人間の活動の痕跡が遺され、人々が活動していた 古代の役所跡である橋樹官衙遺跡群や中世の山城も、多摩丘陵上の多摩川の渡河点を見下ろす交通の要衝に築かれた 	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代での海・河川の資源利用。早稲つや新堀の開削をめぐる水争いを経て、農業用水の役割を終え、現在では市域の都市環境の形成を担う二ヶ領用水 臨海部の新田開発や、近代に水運・土地の利を生かして工業地帯が形成された 	<ul style="list-style-type: none"> 当代の最新の文化や築造技術が取り入れられた古墳や、律令体制へつづく地方支配拠点としての評家。当時先端の仏教文化流入 市域に進出した大工場で最新の生産技術が導入 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸の人々の生活を支える経済圏として、二ヶ領用水の開削による新田開発 江戸を起点とする交通網の中継点として東海道の川崎宿等が設置。江戸時代の交通の要衝が現代の市域構造につながる 江戸時代後半、近郊行楽地として「江戸名所図会」等に取りあげられていた 	<ul style="list-style-type: none"> 戦後日本最大級の石油化学コンビナートが形成。日本の高度経済成長を牽引。 昭和40年代以降東京のベッドタウンとして都市開発が行われ人口が急増 近年は研究開発・イノベーション拠点へ

⑤ 「川崎らしさ」について

- 常設展示で伝えていく「川崎らしさ」については、上記の「川崎市の歴史文化の特徴」や、川崎市総合計画第3期実施計画等で示されている本市の特徴を踏まえながら、今後更なる検討を進めていくが、現時点の案としては、次のように整理ができると考える。

本市の歴史文化の特徴 上記より	行政計画等で示している現在の本市の特徴
(1) 丘陵で営まれた暮らし	川崎市総合計画第3期実施計画 「川崎市のポテンシャル」として、「交通・物流の利便性」「先端産業・研究開発機関の集積等」「豊富なスポーツ・文化芸術資源」「かわさきパラムーブメントの推進」「水と緑の豊かな自然環境」「多彩で魅力ある観光資源」の6つを挙げている。
(2) 水辺に育まれた地域	川崎市ブランドメッセージ 「Colors,Future! いろいろって、未来。」を策定。川崎は、多様性を認め合い、つながり合うことで、新しい魅力や価値を生み出すことができるまちをめざしていく、という意味が込められている。
(3) 各時代に取り込まれてきた最先端の文化や技術	シティプロモーション副読本 「これまでの川崎と今の川崎」の特徴として、「古くから交流がさかんなまち」「産業の発展とともに、多くの人が集まったまち」「いろいろを受け入れてきたまち」の3つを挙げている。
(4) 江戸を支える社会基盤の整備により発展したまちと賑わい	
(5) 日本の近代工業化を牽引しつつ拡大・発展した都市	

<「川崎らしさ」を捉えるためのPoint>

多摩川や東京湾周辺の低地、多摩丘陵の台地など、**地形に由来する特徴**

東京、横浜といった大都市との近接や交通網など、**立地に由来する特徴**

宿場町としての賑わいや近代化・工業化に伴う発展など、**時代の変遷に由来する特徴**

⑥ 「モノ（実物）の魅力」について

- 市民ミュージアムは被災により、常設展示を活用することが多かった社会科教育推進事業においても制約が生じており、現在は出張授業におけるスライド等による解説や運搬可能なサイズの実物の活用のほか、体験グッズの貸出及びワークブックの配布などにより活動している状況の中で、改めて**来館者にモノ（実物）に触れてもらい、その魅力を伝えていくことの大切さ**を本市としても再認識している。
- また、デジタル技術の革新が進む現代社会において、自宅や学校をはじめとした様々な場所で気軽にデジタルデータや情報に触れることができる反面、**モノ（実物）に触れる体験・経験の価値が高まってきている**とも考えられるため、新たなミュージアムの常設展示においては、「モノ（実物）の魅力」を幅広く伝えることができるような仕掛けを検討していく。

(3) 企画展示、収蔵庫展示の方向性

企画展示の目的

- ▶ 常設展示では扱うことが難しい内容やテーマによる多様な展示を行うことができる場となる
- ▶ 巡回展など、借用資料・作品を組み合わせた大規模な展示を行うことができる場となる
- ▶ 常設展示を設けない予定の美術館分野について、定期的にコレクションを公開する場となる

収蔵庫展示の目的

- ▶ モノ（実物）と出会う幅広い機会が創出できる場となる
- ▶ 来館者が自分の視点から自由にモノを見て、考え、発想を広げることができる場となる
- ▶ ミュージアムのコレクションの保管状況を公開する場となる

方向性

- ▶ 企画展示、収蔵庫展示については、柔軟な発想による多様な展示内容、展示手法等が考えられることから、来館者がより親しみ、楽しむことができ、様々な交流や学びが生まれるよう、諸室条件や運用方法も含め、今後具体的な方向性の検討を進めていく（民間活用の検討も想定）